

## 2)、PMD患者の情緒の研究 — 連想刺激語によるGSR結果の検討 —

国立療養所長良病院

丸尾 正志      森崎 郁夫  
榎島 晃      藤田 家次

### 〔はじめに〕

被験者の意識水準が低い場合、さらには答申に偽りがある可能性のある場合には、精神物理的方法と併用して他覚的検査法としてGSRが使用される。一般にPMD患者は言語報告による検査手続きが苦手であり、とくに病氣・死・性に関する分野では、そうした傾向が著しいように思われる。

本報告は、いくつかの刺激語を与え、その反応をGSRを指標として検査し、とくに性・死・病氣に関するPMD患者の情緒について研究したものである。

### 〔実験手続〕

表1. 実験手続

	測定項目	刺激の種類と呈示方法	検査時間
導入の説明			
I section	自発反射	無刺激の状態（意図的な刺激を与えない。	6～11 min
II section	慣れ	500Hz, 50dBの音を15～25sec間隔で20回呈示。	7 min
実験の説明			
III section	連想刺激語に対するGSR	15sec間隔で60語の呈示。	20 min
Introspection			

手続きの概要については、表1.に示すとおりである。Introspectionは①被験者の強く記憶に残っている刺激語5つの選択とその内省②反応が大きい刺激語の内省の2つについて記録した。

### 〔症 例〕

本研究の各症例の性別、年齢、

表2. 症例

	性別	年齢	病型	Stage
(統制群)				
C・C・1	男	21; 2		
C・C・2	男	19; 11		
C・C・3	男	19; 6		
(実験群)				
E・C・1	男	21; 6	D	6
E・C・2	男	19; 8	D	7
E・C・3	男	20; 6	D	6
E・C・4	男	17; 6	D	8
E・C・5	男	20; 2	D	10
E・C・6	男	16; 10	D	6

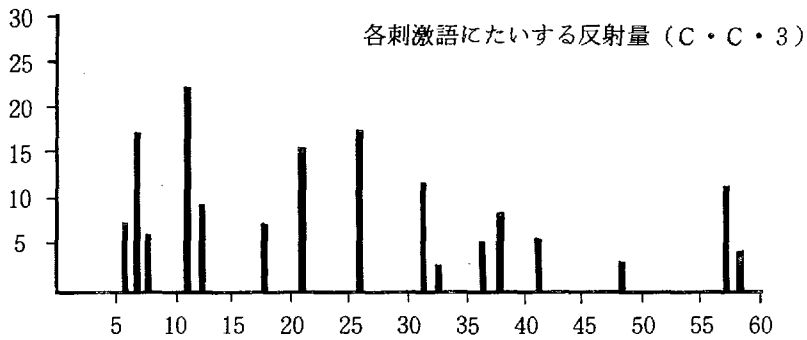
Stage については表 2. に示すとおりである。

〔結果と考察〕

実験の結果は①自発反射の経過②慣れ③連想刺激語にたいする(ア潜時イ)反射量④統制群、実験群の各刺激語群の(ア潜時イ)反射量の検定の4つについてまとめた。本報告では③(イ) (1症例のみ) と④の結果についてのみ示した。表 3 は連想刺激語の分類について示したものである。

表 3. 連想刺激語の分類

- A 語群 — 性に関する語
- B 語群 — 病気・死に関する語
- C 語群 — 病棟でよくつかう語
- D 語群 — 日常よくきく語



(統制群)

	A 語群	B 語群	C 語群	D 語群
A	—	—	—	※
B		—	—	※
C			—	—
D				—

(統制群)

	A 語群	B 語群	C 語群	D 語群
A	—	※※	※※	※※
B		—	※※	—
C			—	—
D				—

(実験群)

※※ P < 0.01  
 ※ P < 0.05

	A 語群	B 語群	C 語群	D 語群
A	—	—	※※	※※
B		—	—	—
C			—	—
D				—

(実験群)

※※ P < 0.01

	A 語群	B 語群	C 語群	D 語群
A	—	※※	※※	※※
B		—	—	※※
C			—	—
D				—

4 つの刺激語群の潜時の検定

4 つの刺激語群の反射量の検定

自発反射については、各症例その経過は多様であるが、いずれも正常な範囲にある。

慣れについては、実験群で20回かかる症例が1例あったが、全体として両群に著しい差異はみられていない。

各刺激語群の反射量では、両群ともA語群が他の語群にくらべて1%の水準で差がみられている。B語群では、統制群がC語群と、実験群がD語群とそれぞれ1%の水準で差がみられている。また、潜時については、統制群でA、B語群がC語群と5%水準でしか差がみられていないが、実験群ではA語群がC、D語群と1%の水準で差がみられる。

本研究では、内省について詳しく検討していないが、全体として、言語報告の結果とGCRの結果とは、かならずしも一致しないことが多くみられる。

## 22 国立療養所西多賀病院に入院の進行性 筋萎縮症児（者）の親子関係に関する研究 I

国立療養所西多賀病院

星 八重子 昆 貢 子  
後 藤 親 彦 浅 倉 次 男

### 〔はじめに〕

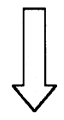
現在当院に入院中のDMP児（者）と親に対して若干の考察を行なったので報告する。親子の断絶が社会的に問題にされてから久しいが、当院においても療育上の問題の中で親子関係が掲げられる。そこでDMP児（者）と親達とのお互いの意識、例えば親に対する要求、子に対する期待等がこの疾患の場合どのように反映しているのか、それぞれの立場に対して観察を行なった。

### 〔経 過〕

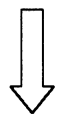
乳離れも完全でないまま長期療養を余儀なくされている患児（者）達にとって、年間数回の外泊、月何度かの面会で、親に対してどの様な態度をとったら良いのか戸惑いを覚えているようである。自由にならない体を持つ自分達を両親は如何に思っているのか、また親の方でも家族と共に生活させてやれない事での葛藤や負い目を感じているようである。

ある日面会に来院してみると、寡黙になっている子ども、親より職員に目を向けてしまう子、この心理を親達はどの様に受けとめれば良いのかと悩む姿を見ることができる。

事例I 患児A（14才）



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

被験者の意識水準が低い場合、さらには答申に偽りがある可能性のある場合には、精神物理的方法と併用して他覚的検査法として GSR が使用される。一般に PMD 患者は言語報告による検査手続きが苦手であり、とくに病気・死・性に関する分野では、そうした傾向が著しいように思われる。

本報告は、いくつかの刺激語を与え、その反応を GSR を指標として検査し、とくに性・死・病気に関する PMD 患者の情緒について研究したものである。